SAPPORO, Japan –

ダルビッシュ有が 124 球目を投じたその瞬間、札幌ドームの満員の観客——4 万 2126 人（45 人のチアリーダーは含まず——そう、なんと 45 人もチアリーダーがいるのである）は、まさに雷のような凄まじい音をドーム内に響かせていた。

そして、渾身の一球が相手打者のバットをへし折ると、その折れたバットがマウンド方向に飛んだが、ダルビッシュはやや遅れて転がって来たボールを落ち着いて処理すると、一塁に投げてゲームセット。

すると、客席の発する音はいっそう大きくなってドームに木霊し、チームの開幕戦勝利を祝う。1 対 0。ダルビッシュ自身は、4 安打、10 奪三振をマークして、勝利の原動力となった。

チームメートとハイタッチを交わしてからダグアウトに戻った日本球界の比類なきエースは、日本ハムのマスコットとも手を合わせる——。

いや、ちょっと待て。もとい。

話を進める前に、ダルビッシュは“日本ハム・ファイターズ”の投手であって、“日本・ハムファイターズ”ではないことを明確にする必要がある。説明がなければ、アメリカ人は勘違いしてしまだろう。

去年まで 5 年間に渡って日本ハムで指揮を執ったロイヤルズのトレイ・ヒルマン監督も、苦笑しながら言った。

「『あなたは日本で、豚と戦っていたのですか』と、みんなは思うだろうね。豚がグラウンドにいて、選手がバットを持っている…」

豚の格好をした侍が刀をグラウンドで振り回す、または、漫画の世界の悪魔が、肉の貯蔵庫でハムにパンチを浴びせる——映画「ロッキー」には、主人公のロッキー・バルボアが、ハムの塊を叩いてトレーニングをするシーンが出てくるが、それはそれで、確かに楽しい余興のように聞こえる。

ただ、話を進める前にクリアにしておかなければならない。彼らは、「日本ハム・ファイターズ（日本ハムの戦士たち）」であって、決して「日本・ハムファイターズ（日本のハムと戦う戦士たち）」ではない。

さて、我々は普段から、アメリカのスポーツが、商業主義に毒されていると感じている。球場の命名権を企業に売ることなどその代表的な例で（ところで、毎年のように名前が変わる今年のサンフランシスコの球場名は、なんだっけ？）、カレッジフットボールのボウルゲームの中には、チキンサンドウィッチの有名なチェーン店、「チック・フィルーA」を冠にした「チック・フィルーA　ボウル」なんていうのもあるし、ミネソタでは、「スナッパー」という芝刈り機の会社にちなんだイニングもある。

しかし、日本野球界のそれと比べれば、目くじらを立てるほどのものではないようだ。

通常、アメリカのプロチームは、そのフランチャイズがある都市名がチーム名の一部となるが、日本の場合は、そのチームを所有している企業名が、チーム名に含まれる。

日本ハム（ハムなどの食品業）に加え、西武ライオンズ（百貨店、鉄道会社などを経営）、千葉ロッテマリーンズ（菓子など）もそうで、東北楽天イーグルスも、球場名が「クリネックス・スタジアム」であるのに、「楽天」はインターネットを中心にビジネスを展開する会社なのである。

彼らにしてみれば、勝つことはもちろんだが、同時に、いやそれ以上にチームを通して会社の宣伝を行うことが優先されているようでもある。

悲しいかな、日本はアメリカの遥か先を行っており、となれば今後、アメリカにも同じような考えが広まるかもしれない。

「ウォルマート・ロイヤルズ」、「ブラックウォーターUSA・レンジャーズ」、「ハリバートン・ヤンキース」——そんなチームが誕生すれば、それは少なからず日本の影響だろう。

そんなビジネス的側面から考えれば、ダルビッシュが 5 年後に FA(フリーエージェント)でメジャーに移籍するか、ポスティングで FA 前にメジャーに挑戦するか——日本ハムの立場に立てば、戦力よりも、経営的判断が優先されてもおかしくない。

もちろん、日本を離れてメジャーに挑戦するかどうかは、かつてシアトル・シーホークスのトレーニングキャンプが行われていた施設のカフェテリアで働いていたイラン人の息子であるダルビッシュ本人の決断によるが、多くの日本人スター選手(イチロー、松井秀喜、松坂大輔、福留孝介ら)が去り、スターとはいえなかった選手らがそれに続く現状を考えれば、彼が、より高い給料と、世界の最高峰であるリーグでプレーしたいと考えることは、むしろ自然なことに思える。

ただ、そのときに本来議論されるべきことは、ダルビッシュがメジャーに行くかどうか、いつ行くのか——ということではなく、この流れが、日本の野球界にどんな影響を与えるのか、ということなのかもしれない。

その答えは難しいが、千葉ロッテのボビー・バレンタイン監督は、いつものように、ユニークな考え方を持っていた。

「今の流れというのは、アマゾンに行って、森林を切り開く——しかし、新しい木を植えずに放置するようなもの。そして、生態系という視点で考えるなら、今の真ん中のレベルの選手たちが消える状況こそ大きな問題で、その結果、ファンを失うだけでなく、日本のタレントレベルを下げることにもなる」

(ところで、念のためここで触れておくが、日本ハムのマスコットは、豚ではない。もちろん? モヒカン狩りの熊である)

NAKED CAME THE PITCHER

アメリカのレトロパークブームは、日本にまで及んではいない。カムデン・ヤーズもなく、日本のプロ野球チームの半分が(大阪ドームを含めた場合)、ドーム球場を本拠地とする。

日本ハムが本拠地とする札幌ドームは、日本と韓国で共催された 2002 年のサッカー・ワールドカップのために作られたものだそう。そのために、ファールグラウンドはすっぽりと両ダコタ州を覆い、ワイオミング州の一部さえ、その中に入ってしまうほど。また、およそ 5 メートル 50 センチのフェンスによって、理想的な投手有利の球場となっている。

試合前――、ダルビッシュが人工芝に足を踏み入れたそのとき瞬間から、日本人記者の半分が、彼のあとに続いた。

彼らは何を聞いているのだろう？

黒星のない、彼の完璧な勝敗のことだろうか？ （5月7日に今季初黒星）

1点台の防御率のことか？

彼がヌードになった雑誌について聞いているのかもしれない。

いや、女優との結婚式のことだろうか？

3月に生まれた子供のことかもしれない。

ひょっとした、アメリカで投げたいか？ なんて聞かれているのか？

彼の夢の一つである、イランの野球界を盛り上げることについて聞かれている可能性もあるだろう。

ただその推測は、どうやらあまり意味をなさない。ダルビッシュはほとんど反応せず、真っ直ぐ外野を目指して歩いていく。この限りにおいて、誤訳などありえない。

その光景からは、ふとバリー・ボンズの在りし日を思い出した。

しかし、ボンズとは違ってダルビッシュは、イメージの問題を抱えているわけではない。

むしろ、その人気は飛び抜けており、特に 10 代の女の子らは、うっとりと彼を見つめている。彼の端正な顔立ちは、広告や雑誌の表紙にも多く起用され（ある雑誌には、ヌード写真さえ、掲載されたことがある）、その人気は、札幌がある北海道だけでなく、日本全国に広がりを見せている。

それも、当然だろう。マウンド上での特別な才能に加え、彼は人口統計学者の理想と言われる？ 196 センチの身長と細身のボディを併せ持ち、掘りの深いエキゾチックな顔立ちは、ベースボールカードというより、カルバン・クラインの広告で見かけそうである。

その独特の顔の特徴は、アメリカで出会ったというイラン人の父ファルサさんと母郁代さんの血を受け継いだものだ。

ラストネームは、ダルビッシュセファット。ダルビッシュの祖父、つまりファルサさんの父が、旅行代理店で働いており、小さなころからファルサさんに、広く世界を見るよう促した。

結果としてアメリカの高校を卒業したファルサさんは、フロリダの大学に進学する。そこではサッカー選手として活躍していたが、1979 年にイラン人の学生らが、テヘランにあるアメリカ大使館を乗っ取り、52人もの大使館員を人質に取る事件が起きると、状況が一転。

アメリカの有名なテレビアンカー、テッド・コッペルの誕生は同時に、アメリカで学ぶ若きイラン人を苦境に陥れた。

「私のコーチは、私を 2 年間ベンチに置いた」と、その頃のことを、ファルサさんが振り返る。

ただ、その言葉から、苦しみは伺えない。ファルサさんは笑みさえ浮かべた。

「それが、私を精神的に強くしてくれたからだ。以来、私は決して諦めなくなった。このことは一度、有にも話したことがある。なぜならスポーツの世界には、自分のことを嫌う人もいるのだから」

ファルサさんは、ワシントン州のチェイニーという小さな街にある、イーストワシントン大学に流れ着いた。実はそこに、先に触れたシーホークスのキャンプ地がある。

その頃のことを語る彼の頬には、さらに柔らかな笑みが浮かんだ。

「カフェテリアで働いていた時、選手らはいつも、2つのトレイを持っていた。一つのトレイにはミルクが乗っていて、もう一つのトレイには山盛りの食べものが乗っていた——。もちろん、シーホークスを応援していました」

その後、残念ながら？　スタン・ジェルボー（期待外れのクォーターバック）の時代を見逃したファルサさんは、郁代さんと日本に戻り、大阪で生活することになる。

彼によれば、間もなく生まれたダルビッシュも初めは、英語しか話せなかったよう。しかし、ダルビッシュが3歳になる頃には、父親の日本語も上達し、やがて、ダルビッシュからも英語が消えていった。

ところで、ダルビッシュは、2度ほど父親の故郷であるイランを訪れている。しかし、その経験は、彼に「何の影響も与えたなかった」と話した。

「僕は日本人です。日本人として育った、100%の日本人です」

ただこの言葉——誰もが頷くわけではないよう。ダルビッシュの名前は、松坂大輔のように、甲子園に出場して一躍有名になり、彼は松坂のようにノーヒットノーランも達成したが、日本のドラフトで彼を指名したのは、なぜか日本ハムだけだった。

それは、ファルサさんがアメリカで味わったような差別——ダルビッシュにイラン人の血が流れているバックグラウンドこそが、どこかで日本社会に受け入れられなかったと聞く。

バレンタイン監督が教えてくれた。

「我々のスカウティングディレクターが言ったんだ。『彼は我々のファンが心底応援したくなるような選手ではない』と。もうそのスカウトは、我々のチームにはいないがね」

ダルビッシュのその後の人気を考えれば、もちろん、そんな見方が間違っていたことを証明する。

だが、そうした考え方は、依然、存在するそう。バレンタイン監督はこう言葉を繋いだ。

「日本人というのは、自分の出身地や、自国の選手に強い思い入れを持つ。そして時に、頭の固い、古い人間は、『あの選手は、うちのチームに入れたくない』と思うようだ」

そういう意味で日本ハムは、そうした選手——つまり、他チームが獲得に二の足を踏むような選手を、ときにリスクを冒してでも獲得してきた。例えば昨年のドラフトでは、大学時代にゲイポルノビデオに出演していたことが発覚して、一度は日本球界に居場所を失ったあの多田野数人（元インディアンズなど）を指名している。ダルビッシュも高校時代は、模範的な生徒とはいい難かったよう。よって、日本ハムしか受け入れ先がなかったとも言われている。

ところで、ダルビッシュがプロ入りしたとき、そこにはトレイ・ヒルマンというアメリカ人の監督がおり、入団当時を振り返って、ヒルマン監督が言っている。

「素晴らしい父親がいた。彼はこう言ったんだ。『トレイ、もう彼（有）はあなたのものだ。私は、あなたが彼（有）を自分の息子のように扱ってくれることを知っている』」

そのダルビッシュの成長は、目覚ましく、しかも着実。新人の年の防御率は 3.53 だったが、2年目には 2.89、そして3年目の昨年は 1.82 にまで下がった。メジャーのワールドシリーズに相当する日本シリーズでは、最後の試合で負け投手になったものの、1 失点。相手は継投で完全試合を成し遂げている。

ちなみに今季は、これまで、5勝1敗、防御率 1.46。

そんな進化するモンスターに対して、かつての指揮官は、賞賛を惜しまなかった。

「有は、稀な才能に恵まれ、またそれを生かすべく、質の高いトレーニングを行って来た」

だからこそ、「彼とあまり話した記憶はない」と言う。

「なぜなら、それを必要としなかったから。彼は、トレーニングの必要性をいち早く自覚し、2006 年のシーズン後などは、すでにトレーニング中心の生活になっており、ニュージーランドへチーム旅行をしたときも、先乗りしてトレーニングを始めていた」

「僕にモチベーションは必要ありません」

ストイックなトレーニングに駆り立てる原動力——それをダルビッシュに問えば、通訳を通して、そうさらりと言った。

「僕は、すべての試合で勝ったり、防御率が 0.00 になるまで、決して満足することはない。もっと早いストレートを投げたいし、カーブも鋭くしたい。すべての球種を磨きたい」

多くの人は、すでにダルビッシュのレベルが松坂大輔と同等か、すぐにでも追いつくと見ている。

ヒルマン監督も、その見方に異論はない。

「彼の成績は今後、松坂が日本でマークしたような数字に並ぶだろう。体型はまるで違い、松坂の方が力感があるが、ダルビッシュの身体の方が柔らかく、しなりがある。そのおかげで、彼はストレートと同じぐらい、第2の球が威力を持っている。カーブなど、打てる球ではない。正直言って、フェアではない」

イチローがアメリカに来た当初、彼のヌード写真を撮ったら、日本の出版社が、100 万ドル（約1億円）で買い取ってくれるという噂があった。彼は、それを本気にしたのか、クラブハウスでは慎重に着替えをしているように見えた。

一方でダルビッシュはもう、昨年の夏にヌードとなり、その写真が雑誌に掲載された。かつて、高校生だった時には、タバコを吸っているところを写真週刊誌に撮られたこともあるようだが、今となっては心地よい環境に身を委ねている。

昨年は女優の婚約者と、試合に勝って、お立ち台で妊娠していることをファンに報告すると約束。実際、その通りになった。

イメージに関しては、普段は芸能人などをマネージメントする会社に管理を任せている。

「出る杭は打たれる」という言葉があるが、彼は自信家でもある。

「僕は、どんな大きな試合でも、10 が最大だとしたら、10 の力を出す自信があります」

ヒルマン監督は、ダルビッシュがタイガー・ウッズやマイケル・ジョーダンのような市場価値があるとさえ言った。

「彼は、自分がクールな存在であることを理解している。彼は、自分がある意味、神秘的な存在であることも理解している」

ヒルマン監督はダルビッシュがシェイプされた体型を保っていることについて、「そこには『支配的な投手になる』という意欲もあるが、自分の広告価値を十分に知っているからでもある」とも話していた。

COMING TO AMERICA ... OR NOT

ところで、ダルビッシュ本人には、メジャーで投げたいという意志があるのだろうか？　残念ながらインタビュー前、チームからこうリクエストされた。

“メジャーリーグに興味があるかどうかといった質問はお控えください”

ただそれは、その質問に答えているに等しいのではないか。

もし、ダルビッシュに全くその気がなければ、「興味がない」と言えばいいだけのことである。

「私が、彼に何も言うなと言ったんですよ。言えば、関心を引くだけだから」

そう話すのは、日本ハムのチーム統括本部長、島田利正氏。

「そうすれば、彼の人気は増し、さらにはチームの人気にも繋がると言いました」

「人気を高めたい」ということはつまり、ダルビッシュのポスティングフィーを吊り上げたい——という含みもあるのか？

日本のルールでは、FA になるのに、9 年を要する（制度の見直しが現在話し合われており、7年、もしくは8年になるとも噂される）。

ダルビッシュの場合は、まだ4年目。ただ、イチローや松坂大輔のように、ポスティング（入札）という制度によって、FA になる前に、メジャーに移籍するという選択肢がある。

入札となった場合、どのチームにも獲得のチャンスがあり、最高額を入札したチームが独占交渉権を得て入団交渉できるが、その過程については、松坂大輔がレッドソックスに入団した経緯を思い出していただきたい。

日本の各チームは、選手が FA になる前年の年までそうすることを好まないものの、日本ハムの山田正雄 GM はこの春、キャンプでこう言ったそうだ。

「制度に乗っ取った移籍は認める方針です。選手を縛り付けるようなことはしない。うちはむしろ、メジャーに求められて活躍できるような選手を育てたい、という方針でやってきましたから」

あるファイターズの担当記者は、「今年の彼を見ていると、より大きなチャレンジに飢えているように見える。つまり、ないとは思うけれど、今オフにポスティングを希望する可能性を否定できない」と話し、「そうでなくても、2－3 年のうちにはポスティングされるのでは」と現場に流れる空気を教えてくれた。

さらに彼は、ダルビッシュの奥さんがアメリカに行きたいかどうかも、その決断の要素になるかもしれないと推測する。

一方で、アスレチックスの環太平洋スカウトのランディ・ジョンソン氏はそれに否定的で、「いずれはポスティングされるだろうが、ここ数年の話ではない」と首を振り、「日本に残る」と話す人がいることも紛れもない事実である。

「そういえばこの間読んだ記事の中に、日本ハムは昨年、黒字になったという話が書かれていた。これは、多くのチームが親会社の広告塔としてみなされ、何億円も赤字を出している現状を考えれば、他チームの刺激になったはず」とバレンタイン監督は言う。

「ダルビッシュがポスティングされてアメリカに移籍したら、すぐにでもローテーションの核になるだろう。ただ、個人的にはそうならないことを願う。いい選手は、ここに残って欲しい。出来れば、日本プロ野球機構が、それを止められるような組織であって欲しい」

ところで、もしダルビシュがポスティングにかけられたら？

過程の話だが、多くはその入札額が、西武がレッドソックスから受け取った 50 億円を突破するだろうと、当然のように口にする。前出のジョンソンも言った。

「資金力のあるチームが参加する限り、その金額は青天井となるに違いない」

さて、アメリカ行きについて話すことを好まなくても、イラン行きについてはそうでもないよう。父ファルサさんは、故郷の野球発展を願う。

「イランの野球リーグの発展に何かできることはないかと、考えているんです」

その思いにダルビッシュも賛同し、「出来れば、父の夢を手助けしたい」と話す。

ブッシュ大統領のお気に入りスポーツをイランへ——。

「もちろん、イランは僕のお父さんの国ですから。現地での野球人気を手助けできるなら、喜んで協力したい。それが、お父さんにとってどんな意味を持つのか、理解していますから」

もし、ダルビッシュが“偉大なる魔王の国”の国技をイランで人気スポーツにすることが出来るなら、その前にまず、よりハードルが高いものに挑戦して欲しいとも思う。例えば、100 年も優勝から遠ざかっているカブスと契約して、彼らをワールドシリーズに導く——といったような。

ところで、アメリカのファンは、ダルビッシュの移籍を待ち望んでいるが、その前にこの夏、オリンピックでダルビッシュの姿を見ることが出来るだろう。また、来年の春に行われるワールドベースボールクラシックでも、そのピッチングを見ることが出来るかもしれない。

ファルサさん自身は、ダルビッシュのバックグラウンドについて、2 回ほどアメリカ旅行に行ったことがあることに加え、叔父さんや叔母さんがアメリカに住んでいるので、息子がメジャーの世界に適応することは難しくないだろうと考えている。

「もし彼が行くことを決めたなら、彼は正しい人々に囲まれ、正しい関係を持つことが出来るはず。彼がアメリカに行きたいのなら、もう、準備は出来ている」

仮に、ファルサさんが息子に投げて欲しいチームがあるかと聞けば、彼は二つの街の名を口にした。

「個人的には、ニューヨークとかボストンが好きです。彼がそこに行くかどうかは彼の判断——。どの街も素晴らしいと思いますが、個人的にはニューイングランド地方が気に入っています」

セオ・エプスタイン？　ブライアン・キャッシュマン？　目が覚めたかい？

A HITCHHIKER'S GUIDE TO SPRING BASEBALL

ところで、日本人選手にとって、メジャーでプレーする機会がどうやって誕生したのか。それを知るには、スポーツコートに身を包み、レッドソックスと読売ジャイアンツの親善試合に姿を見せていた男に聞くのが一番。

その男の名は、村上雅則。44 年前、彼は日本人初の大リーガーとなった。

1964 年。全く違う時代が、アメリカにはあった。第 2 次世界大戦が終了して、まだ 20 年に満たないその時代、アメリカにおいて寿司など、まだ未知なる食べ物で、ましてや、日本車など、アメリカの道路で見かけることはまずなかった。

野球史で特筆すべきは、当時はまだ、今ほど選手の給料も高くはなかったことか。特に南海ホークスとサンフランシスコ・ジャイアンツによる複雑な交換によってアメリカを訪れた日本の 19 歳の少年にとっては、さらに状況が厳しかった。

それを村上氏は、当時、ジャイアンツのキャンプが行われていたフェニックスとツーソンの間にある、カサ・グランデという小さな街で知ることになる。彼は、キャンプが終わるまで、給料が払われないことを知らず、「車を持っていなかったから、街に夕食を食べに行くのに、ヒッチハイクをするしかなかった」と当時を振り返っている。

寂しい経験の連続だったそう。「ある日僕は、フレスノで行われた試合で負けたんです。そして次の日も、負けた。本当に申し訳ないと思った。でもその連敗のあと、誰も話し相手がいなかった…」。

村上氏は、二年に渡ってジャイアンツでプレー。南海ホークスとジャイアンツが契約を巡ってもめたことで、彼は日本に帰ることになるが、それから野茂英雄が海を渡るまで、30 年という年月を要した。

ただ、野茂が移籍してからは、多くの選手が海を渡り、現在では 16 人の選手がメジャーで活躍している。

彼らの道というのは、すでに整備され、給料の面でも、日本にいるときに比べれば、軽く三倍は稼げるようになった。松坂は最初の年ですでに、1000 万ドル（約 10 億円）近くを稼いだのである。

ダルビッシュがメジャーに移籍した場合の予想も、難しいことではない。少なくともアメリカ行きを選んだとき、ヒッチハイクなどをしなくてもいいだろう。

「日本のリーグにとっては、損失が大きい」と村上氏は話すも、流れは理解する。

「いい選手が、世界最高峰のリーグでプレーするのは、自然の成り行き。それは、音楽家たちが、カーネギーホールで演奏したがるのと一緒です」

ところで、選手らの流出は、どう日本の野球に影響を与えているのか？　聞けば、松井秀喜が去ってから、日本のヤンキースとも呼ばれる読売ジャイアンツのテレビ視聴率は、常に 20%以上を誇った 1980 年代に比べて激減。いまや、一ケタ台だそうである。結果としてテレビ局は、ホームゲームの中継削減を迫られるほど。

イチローがマリナーズに移籍したあと、オリックス・ブルーウェーブも集客に苦しんだ。当時、神戸に取材に行ったが、観客数は手で数えられるほどで、いまやオリックスは、近鉄バッファーローズを吸収し、何とか生き残っているという状態だ。

日本の現状を知るヒルマン監督も、「イチローが去ってから、まだファンは戻ってきていない」と寂しそうだった。

日本において野球は、日本プロスポーツ界の頂点に君臨して来た。個人的な博物館があるのが、なによりその証拠でもあろう(イチローの個人博物館はユニークで、彼が中学校のときにしていたという歯の矯正用のリテーナーまで展示してあった)。

「You Gotta Have Wa」の著作などで知られる、日本在住のロバート・ホワイティング氏は、真剣に将来を懸念している。

「2001 年以来、日本は最高の打者を失い、ホームラン打者を失い、最高の捕手を失い、二人の最高の内野手を失い、最高の投手たちを失った。今年も何人かのオールスターを失ったが、今、メジャーで活躍しているうちの三人は、日本の野球史上に照らし合わせても、オールスターと呼べる選手。ファンというのは、そのチームにスター選手がいてこそ、愛着を深める。ただ、そしうた選手が次々に出て行ってしまうとなると…」

「多くが、真剣に心配している」と、ヒルマン監督も眉間に皺を寄せた。

「日本球界を背負うべき逸材が、どんどん日本を離れ、他の選手もそれに続く。こんなことを聞いたのは、一度や 2 度ではない。『選手をキープして、我々を助けてくれ』」

バレンタイン監督は、今の状況をニグロリーグの歴史になぞらえた。

「ジャッキー・ロビンソンがメジャーに行って、他のスター選手がそれに続いた。さらには、ミドルレベルの選手も続いた。そうした結果が、ニグロリーグの消滅に繋がった事実がある。球場は一杯だったし、チームは多くの都市に散らばっていた。それでも、消えてしまった。ここ(日本)でも同じことが起きるかどうかはわからないが、可能性はある」

次の言葉は、日本のファンの声を代弁する。

「MLB はその状況を理解すべきである。なぜなら、野球は、アジアにおいて大切な文化。有能な選手だけを奪ってはいけない。MLB がすべきことは、野球が世界中で発展すること。アメリカの一部のフランチャイズだけが発展することではない」

"WHERE DID THE DAMN GAME GO?"

京都の高瀬川に沿って植えられている桜が、まさに満開を迎えようとしていた。細い路地には、時に芸者たちの姿が見え、小さな橋を渡っていく。通りは、赤い光に照らされ、実に幻想的。アジアのもっとも美しい情景が、ここにある。

ただ、それにうっとりしているわけにはいかない。テレビ画面には、日本ハム対西武ライオンズの試合が映っており、ダルビッシュがマウンドにいるのだ。

桜? 灯り? 芸者? すべては後だ。ダルビッシュはまた、5 回まで相手を完封しているのである。

よし！　あれ？

なぜ突然、ニュースキャスターが画面に出てくるのだ？　ダルビッシュはどこに行った？　試合はどうなった？　何が起きた？

まあ、落ち着いて、テレビのリモコンを置こう。午後 7 時だ。ニュースの時間なのだ。

これは同時に、日本野球の一面でもある。NHK が放送しているときは、試合の進行がどうであろうと、7 時からニュースが始まる。民放で放送されているときも、午後 9 時には放送が終了する。その後はゴールデンタイムで、視聴率もスポンサー費用も上がる。稼ぎ時を迎え、野球はお役ゴメンとなるわけだ。ダルビッシュが投げていようが、ゲーム途中だろうが、それは関係ない。中継は終わりなのだ。

日本野球には、モヒカン狩りのマスコットがいるけれど、決して彼らはマーケティング力に優れているとは言えない。

「日本の野球を見ながら、メジャーリーグに関連する広告を多く見かける」と話したヒルマン監督の指摘には、改めて頷かざるを得ない。

「過去 5 年間、ダグアウトから試合を見てきたが、スコアボードにはイチローが映り、ピンストライプを着た松井秀喜が顔を見せ、レッドソックスのユニホームを着た松坂大輔のコマーシャルが流れる。もし、日本球界が改革を行いたいのなら、向こうの商品をこちらで売ることを止めることかも知れない」

マーケティング力をつけるためにすべきこと――ヒルマン監督は、「日本のプロチームが、揃ってプロモーションをすること。そして、ダルビッシュのような選手の流出を防ぐこと」と話したが、簡単なようでいてそれが、上手くいかないようだ。

バレンタイン監督の言葉は、少し意外に聞こえた。

「アメリカの方が個人志向が強く、日本の方が協調性があると思われている。しかし、メジャーは金持ちによって所有されている 30 チームが、実は揃って頑張っている。プロモーションを協力して行い、一部の収入も共有し、テレビの契約金なども分配されている。しかしここでは、12 チームがまったく別のことをしている。彼らは、何も共有していない」

それは、日本で最も資金力のある読売ジャイアンツが、パ・リーグの開幕と同時期にレッドソックスとアスレチックスを日本に招待した背景を的確に言い表している。

「レッドソックス対アスレチックス」の開幕戦開催は、多くの議論を巻き起こした。

これには、読売ジャイアンツの上原浩治までもが、「どうしてパ・リーグのシーズンが開幕したタイミングで、メジャーのチームがこっちに来るのか」と、異を唱えたほどである。

アジア地域を担当する MLB 国際部のジム・スモール副社長は、「日本（パ・リーグ）の日程が決まる前に、招待の話が来た。我々は、それを受け入れただけだ」と批判には困惑気味で、日本の問題は選手の流出だけでなく、やはり「マーケティングだ」と、彼は付け加えた。

「もちろん、すべてのアジアのファンに、メジャーリーグファンになってもらいたい。でも、彼らはマリナーズファンにも、タイガースファンにも同時になれるはず。彼らは、金本知憲のユニホームも、イチローのユニホームも着られるはず。要するに、我々は“産業”として発展しなければいけない。それは、日本の野球とメジャーが揃って発展すると

いう前提です。私たちは、一緒になって、子供たちを野球ファンとして育てなければならない。彼らをビデオゲームや、テレビ、サッカーなど、他のスポーツに奪われてはいけないんです」

だがそんな一方で、スターの流出が、ある面ではプラス効果を日本の野球界にもたらしているよう。バレンタイン監督は、アメリカで日本人が活躍することによって、「(日本の野球界の)レベルが上がった」と話す。また、球場の施設なども、メジャー並みに変りつつあると感じている。

確かにジャイアンツ戦のテレビ視聴率は下がったものの、日本の野球ファンは、他のチームの野球を見るようになったとの見方もあるようだ。

以前は東京ドームを読売ジャイアンツと共有していた日本ハムは札幌に移転して、集客力を上げた。もちろんそこには、ダルビッシュとの契約もあって、「彼が、ファンを連れてきた」と、ヒルマン監督も影響を認める。

そんなダルビッシュの人気を考えるなら、日本の野球界が必死で彼を食い止めるのは当然だろう。アメリカに行ってしまえば、日本球界にとっては大きな、大きな損失である。

つまり、彼は日本の野球界を支えることが出来る存在。

彼のおかげで、人気を取り戻すことが出来るかもしれない——いや、少なくとも、人気が下がるのを遅らせることが出来るかもしれない。

ただ、先にも触れたように、日本の野球界ではなく、日本ハムにとってベストの決断とは何か、ということもまた、そこには関係する。

一方で、ダルビッシュが日本を離れるとしたら、日本のファンはどう思うのだろう？　ホワイティング氏は、「彼らは、悲しみで逆に無感覚になってしまうだろう」と苦笑した。

「彼らはこれまで、多くの選手を失ってきた。半ば諦めの気持ちも生まれ、『次は誰だい』ということになるかもしれない」

ところで、京都にはニュース番組にも邪魔されず、ゆっくりと試合が見られるところがある。だが、そこでダルビッシュの姿を見ることは出来ない。その店には、岡島秀樹のユニホームが飾られていて、2004 年と 2007 年のワールドシリーズのテープが、途切れること流されている。そのバーの名前は、「フェンウェイパーク」という。

THE KIDS ARE STILL ALL RIGHT

日本の野球界を正しく理解するためには、明日の選手たちが汗を流すアマチュアレベルの野球にも目を向けなければならない。例えば、日本では俗に「甲子園」と呼ばれる高校野球の全国大会が人気である。それは、アメリカにおける、大学バスケットの NCAA トーナメントと考えてもらえばいいが、高校野球は、全試合が全国中継され、負けたチームの選手は、涙ながらにそのグラウンドの土を持ち帰るほど純粋な世界でもある。

そしてトーナメントは、これまでにダルビッシュのようなヒーローを一夜にして生み出してきた。

リトルリーグの世界にもまた、注目すべきで、例えば、松坂大輔が所属した「江戸川南リトル」は、週末になると、1 年中、朝 9 時から日没まで、練習に明け暮れる。

ある暖かな土曜の午後、東京ディズニーランドの近くにあるグラウンドを訪れれば、7 歳から 15 歳までの子供たち、約 70 人が白球を追っていた。ただ、驚くことに、グラウンドを使うのは午後からで、朝 9 時からは 3 時間ほど、隣の砂浜で走り込みを行うそうだ。

3 時間ものランニング？　砂浜で？　アメリカの子供たちなら、3 分ともたないであろう。ターゲットというアメリカの量販店で、X－BOX か任天堂の「ウィー」を目指して走らない限り。

「子供たちも、走ることは好きじゃないです」と、総監督を務める有安信吾氏は苦笑い。

「でも、こう言うんです。『松坂も走ったぞ！　プロの野球選手になりたかったら、走れ！』」

走り終えた後、彼らは年齢別に三つのグループに分かれ、打撃練習などを開始する。彼らは、全員がユニホーム姿で、ボールが見えなくなるまで、泥にまみれ、額に汗をかく。

過去 9 年、日本がアメリカで行われるリトルリーグのワールドシリーズで 3 度優勝しているが、それもこの光景を見れば、当然の結果と納得できる。

有安監督は、67 歳になるそうだ。監督歴は、30 年を越える。少年時代の松坂も見守った。

彼は、昔のエピソードも交え、子供たちがフリー打撃を行っている間を利用して、実に様々な話をしてくれたが、ある時、一瞬にして笑みが消え、次の瞬間には声を張り上げていた。

「内角に投げるなといっただろう！」

すると、グラウンド上の全選手が直立不動となり、帽子をとる。

それまで、ずっと我々と話し込んでいて、あまりグラウンドを見ているという感じはしなかったが、監督はインタビュー中も、選手の動きに目を配っていたのである。

彼は、言った。「試合では、内角を攻めることもある。でも、練習で投げる必要など、全くない」。

苦い思い出がある。かつて、二人ほど死球によって顎を骨折した教え子が、野球を辞めざるをえなくなった・・・。

子供たちは、有安監督の声にうなずき、「ハイ」と大きな声で返事をしてから、練習に戻る。もう、ビーンボールもなくなった。

有安監督は、実に厳しく子供たちを鍛え上げている。少なくとも、「頑張れベアーズ」の監督、モリス・バターメーカーよりも。

「日本の少年野球を見て驚くのは、子供たちが、すべてのものに大きな敬意を払っていることです」と、前出のスモール副社長は話してくれた。

そんな彼の息子も、東京のリトルリーグでプレーしたそう。

「グラウンドに来ると、彼らはまず、帽子をとって、グラウンドにお辞儀をする。なぜなら、グラウンドは神聖な場所だと考えられているからです。そして打席に入るとき、主審にもお辞儀をする」

やってはいけないこと――これは、彼の息子も早い段階で教えられたようだが、それは、「グローブを投げること」という。

「道具であるグローブもまた、神聖なものであると教えられる。今も、松坂大輔や多くのトップ選手は、グローブを大切にしている。それは、素晴らしい日本文化の一面だと思う」

ただ、そんな伝統的なリトルリーグの世界でさえ、変化を見せているそうだ。例えば日本では、ゴロを体の正面で捕るように教わるそうだが、今の子供たちは、バックハンドで捕ろうとするという。有安監督が「何をしている！」と声を挙げると、子供たちは、「テレビで見た」と言うのだそうだ。

おそらく次は、フライを片手で捕るようになるのだろう。そして、ホームランを打った瞬間、それを自信たっぷりに見送るようになるのだろう。3 月、東京を訪れていたのは、マニー・ラミレスなのである。

最も顕著な変化は、「子供たちが、メジャーでプレーしたいと口にするようになったこと」と、有安監督は少し複雑な表情を浮かべて言った。

「日本のプロ野球には入らず、直接メジャーでプレーしたい、というような子が増えてきましたね」

確かに、そうすれば、ダルビッシュのようにフリーエージェントになるまで 9 年も待つ必要がないし、ポスティングされる必要もない。だが有安監督は、「それも仕方がない」と言った。

となれば、子供たちに話すことも昔とは少し変わってきたようだ。

「前は、よく言ったものです。『日本は第 2 次世界大戦で負けた。体の大きいアメリカ人に勝つには、彼らよりも練習をしないと追いつけないぞ』と」。

効果はありますか？　と聞けば、監督は苦笑した。

「反応ですか？　『はぁ？』、『第 2 次世界大戦？』という感じです。彼らは知らないんですね。だから、彼らにやる気を起こさせるときには、代わりにこう言います。『松坂のようになりたいか！』」

そんな話をしている時、大関拓見君という少年が、トスバッティングを行っていた。そのときのスムーズなスイングは、その上で、アイススケートができるほどである。そして彼が打席に入ると、打球は軽々外野の頭を越えていった。

有安監督は、「彼を見ると、松坂を思い出す」と目を細める。

「投手ということでいえば、球も速いですし、この時点では、松坂より上かもしれません」

監督は、大関君を呼んだ。走ってきた彼は、帽子をとると、丁寧に腰を曲げる。11 歳と聞いたが、年齢にしては大きい。170 センチ近いのではないか。他の子供たちと比べても、頭一つ大きかった。

この世代は、体の大きな子がとかく試合を支配しがちである。彼はその典型だろうか？

いや、ダルビッシュのように成長して、将来はプロとして何十億円も稼ぐのだろうか？

ひょっとしたら将来、彼はダルビッシュと一緒に日本のタイトルを目指すことになるのかもしれない。

それとも、ダルビッシュがメジャーに移籍したら、彼がダルビッシュの役割を担うのか？

それは、時が教えてくれるだろう。

ダルビッシュは、将来について語ろうとしなかった。一方で目の前の少年は、目指す世界を、はっきりと口にした。

「レッドソックスで投げてみたいです」

日本のファンは、一少年の言葉が、彼らを刺激するものなのか、寂しいものなのか、あるいは、その両方なのか、いずれ直面することになる（日本とアメリカにいるヤンキースファンは、すでにそれを感じているだろうが）。